慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝(3353)1211(大代表)

賀詞　2012年を迎えて

2012年の年頭にあたって

塾長　清家　篤

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。年頭にあたり皆様のご健康、ご多幸を心からお祈り申し上げます。慶應義塾は2012年も学問によって教育、研究、医療の質を向上させ、日本と世界の社会に貢献していきたいと考えています。

そのような目的のために慶應義塾を構成し、教育、研究、医療をおこなっている教職員、塾生、塾員をはじめとした皆様が日々努力されていることに改めて敬意を表するものです。そうした皆様の日々の活動の質をさらに高めていただき、慶應義塾の社会への貢献をさらに進めて頂ければこれにます喜びはありません。

さて、昨年発生した東日本大震災は、日本の経済社会に大きな影響を与えました。日本の直面している状況は厳しいものがあります。まず被災地の復興、そして日本経済全体の回復をはかり、更なる発展を成し遂げなければなりません。

福澤先生が創られた慶應義塾に学んできた私達は、実証科学という意味での「実学」、ものごとの軽重大小を冷静に見極め、正しい判断を行うという意味の「公智」、さらに災害などに遭って厳しい状況にある人たちを思いやる心という意味の「徳心」を大切にして、日本のこの厳しい状況を乗り切っていかなければなりません。医学部、病院の皆様には、救援医療団などの活動を通じて慶應義塾の名を高めて下さったことにも感謝致します。

2012年度の事業計画の基本方針と大綱には引き続き『大学病院の経営改革を推進するとともに、医療環境を向上・充実させ、世界に冠たる大学病院の構築を目ざすこと』と掲げています。さらに医学を深め、それによって医療を施し、そしてそれらの活動を支える支援業務の力を最大限に高めていっていただきたいと思います。

今年の医学部、病院では、予防医学の新たな発展を目指すべく、現在建設中の3号館（南棟）に設置する予防医療センターにおいて2012年8月から人間ドックを開始することになっています。また2011年を通じ準備してこられた総合医療情報システムによる電子カルテも本格導入され、対監査性の向上、教育、研究への二次利用の可能性なども期待されています。さらに建物への耐震補強工事も昨年から今年にかけて実施し、より一段上の安心・安全の確保も急ピッチで進むなど、医学部・病院では多くの方々が実に様々にご努力をされていることに心から感謝申し上げます。

また2017年の医学部創立100年もいよいよカウントダウンに入りました。義塾財政の改善との両立はとても難しい課題ではありますが、今年も引き続き信濃町地区が一丸となって、新病院棟の計画作りも含め、準備を進めていただければ幸いです。これからも三四会の皆様をはじめとする関係者のご支援を賜わりながら、慶應義塾の医学部、病院の教育、研究、医療環境を向上・充実されることをお願い致します。そのことは、教育、研究、医療を通じて社会に貢献しようとする慶應義塾にとって不可欠のことだからです。

信濃町を若い力で

三四会長　比企　能樹

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

本年の賀詞を口にする時に、格別な二つの思いが交錯致します。一つは、どうか今年こそ穏やかな平和な生活を送れるようにと祈ること、そしてもう一つは昨年の痛みを乗り越えて新しい希望に向い出発するぞと言う意気込みであります。

昨年の東日本の地震と津波そして放射能の事故、和歌山や各地を襲う突然の豪雨、それらが起きた原因は、いずれも何らかの人災ではなかろうかと考えざるを得ません。

天災と言えども寄って来たる原因は、人間が享楽を追求した結果の自然破壊と言われています。地球温暖化は闇雲に文明を発展させる際に生じたもので、全世界が地球と言う星の将来を考え、協力をしなければならないものでありましょう。だからと言って進歩を止めるのではなく、より良い方向への転換を考慮する時に今来ていると思いました。

今年は、挙って痛みを乗り越え新しい希望へ向う年であると言われています。三四会員にとっての希望は何と言っても、2017年に迎える医学部創立100年に、どんな素晴らしい医療の場が実現しているかでありましょう。節目の年に何を記念に残そうかではなく、塾に連なる人々が口を揃え「慶應の医療施設」と胸を張って言えるものができてこそ、初めて将来に残すべき礎ができたと申せましょう。

塾が150年を迎えた時から、既に信濃町の再興を目標とした各施設が、計画に従って着々と出来上がっております。そして、その締めくくりに医学部100年を期して、最先端医療を行う新棟の姿を見ようとしています。

新棟のハード面を整えるためには、三四会はもとより社中が挙って慶應の医療を良くしようという強い思いと、塾150年事業以来行われた募金を基として、更なる努力を実践しなければなりません。医学部100年に姿を現すであろう新棟は、その時に医師となる諸君が、この施設で、この勉強をして、その医療をしたいと、躍らすものにしたいと考えております。

ソフト面に関しては、昨年度に医学部をはじめ三四会が行いました各賞の受賞対象が、いずれも世界に誇れる最先端の医学領域で、それに携わる方々の切磋琢磨を見ることができました。しかし、基礎医学部門における業績は非常に脚光を浴び実際に第一線を走っているのを見るにつけ、正直に申して、臨床部門においても揃って更なる努力が求められるのではなかろうかと感じました。「この病気なら慶應病院に行けば盤石」という、いわば看板が大いに必要ではないかと思います。新棟が完成の暁には、そういう基礎と臨床の一体となった強い勢いも掲げてほしいと願います。

昨年6月の三四会では、人事面で大きく若返りを果たしました。爾来、若い役員・理事諸君が力強く活発に業務を推進しております。その様子を見て力溢れるこの諸君が、来るべき100年に向け確実に走り始めたと期待が膨らみます。ベテランの方々には前向きな観点で、若い力の推進を応援して頂くことと確信しております。

新年にあたりまして、皆様のご健勝を切に祈りあげます。

（外37回）

慶應医学の将来を語る ―創立100年に向けて―

歴代医学部長・病院長・三四会長15名が参加

（後列左から）末松、戸山、池田、村井、山崎、相川、武田
（前列左から）猿田、比企、安田、塚田、末舛、矢部、神崎、北島

慶應義塾大学医学部創立100年に向けて、世界に冠たる総合医学府の構築を目指す医学部長・病院長・三四会長15名が参加した会合。

慶應義塾大学医学部は、５年後の2017年に創立100年を迎えます。医学部・病院では「教育・臨床・研究」のすべてにおいて改革を推進するとともに、悲願である新病院棟建設についても具体的検討に入っています。昨年末の12月26日には、慶應義塾大学医学部の常任理事・医学部長・病院長・三四会長経験者が集まり、講演会を開催。末松医学部長と武田病院長が「慶應医学の現状と創立100年位向けて」と題した講演を行った後、歴代医学部長・病院長らを交えた意見交換・自由討論を行いました。ここでは新年のご挨拶を兼ねて講演を行った３名からの報告を掲載します。当会の詳しい内容については２月号にてご報告します。

慶應医学創立100年
―世界に冠たる大学病院を目指して―

慶應義塾　常任理事　戸山　芳昭

三四会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。今年、慶應義塾は創立154年を、そして医学部では95年目を迎え、創立100年まで残すところ5年となりました。昨年の3・11東日本大震災は我が国にとって敗戦以来の大きな試練の年となり、今なお復旧復興にはほど遠い状況にあります。特に被災地の皆様方には過酷な状況が続いており、今年こそは元気の出る、光が見える1年になればと念じております。そして、日本が教育、医療を含め政治、経済が大きな変革期にある現在、私学の雄として慶應義塾が、そして医学部が日本を先導し、義塾は次の創立200年に向け、医学部は創立100年、そして次の100年に向けて、世界に冠たる総合大学、医学部の構築を目指して進化し続けていくことを願っております。

さて、信濃町では今年春に3号館南棟が竣工し、8月からは念願の予防医療センターがオープンします。別館内にあった健康相談センターが閉院してから約4年経過し、慶應での健康診断を希望していた方々には大変ご迷惑をおかけしてきましたが、PETやMRIを含め最先端の医療機器を導入し、消化管内視鏡検査も取り入れてスタート致します。いよいよ基礎医学と臨床医学に予防医学を加えた新たな〝慶應医学〟の実現に向かって一歩前進となりました。更には、外来腫瘍センター内で抗癌剤治療なども本格稼働致します。今後の慶應予防医学、そして癌を中心とした臨床腫瘍学の発展を大いに期待しているところです。

しかし、医学部にとっては何と言っても2017年の創立100年に向けての新病院棟建設が最大目標であることに変わりありません。新病院棟建設を契機に〝世界に冠たる大学病院〟の構築を目指し、昨年から塾、信濃町が一体となって本格的協議に入りました。医学部創立100年時には、医学部・薬学部・看護医療学部が一体となり、基礎医学と予防医学、臨床医学が融合した信濃町キャンパスを創り上げたいと考えております。しかし、この新病院棟建設時には、医学部・病院が旧態依然とした構造・体制を見直し、全ての面で信濃町が次の100年に向けた改革を推し進めていく必要があります。特に、義塾から求められている抜本的な経営改革は必須であり、「病院の経営改革なくして世界に冠たる大学病院の実現なし」の意気込みで、信濃町の教職員そして塾が一体となって現在取り組んでいる最中です。

ところで、北里柴三郎博士を医学部長にお迎えして医学部が開講してから100年になろうとしている慶應医学は、先人達の努力により日本でも有数の医学府を築き上げて頂きました。私どもが今、慶應義塾の将来を語る時、もう一度〝慶應医学の原点ならびに変遷〟を見つめ直し、理解した上で、次の100年を考えていく必要があります。そこで、昨年暮れの12月26日(月)に歴代の医学部長、病院長、三四会長に加えて医学部出身の担当常任理事の先生方にお集まり頂き、「慶應医学の将来を語る―創立100年に向けて」なるテーマで意見交換をする場を設けました。

歴代医学部長として塚田裕三先生(26回)、安田健次郎先生(33回)、猿田享男先生(43回)、北島政樹先生（45回）、池田康夫先生（47回）、病院長として矢部裕先生（36回）、神崎仁先生（40回）、北島政樹先生、村井勝先生（46回）、相川直樹先生（47回）、戸山芳昭（54回）、三四会長として末舛恵一先生（28回）、常任理事として安田健次郎先生、猿田享男先生、山崎元先生（47回）、そして現医学部長の末松誠先生(62回)と病院長の武田純三先生（52回）、三四会長の比企能樹先生（37回）、現理事の戸山を加えた計15名が参加致しました。

先ず会では、現執行部である末松医学部長と武田病院長から「慶應医学の現状と創立100年向けて」と題してそれぞれ約20分程の講演を頂きました。お二人からは、現在取り組んでいる医学部改革や経営改革、新病院棟建設計画等について、現状分析とその問題点や今後の取り組みへの基本方針等についてお話し頂きました。その後、「慶應医学、次の100年に向けて」をテーマに全員で意見交換を行い、お互いの慶應医学への熱い思いを語って頂きました。今後の慶應医学が向かうべき方向性について屈託ないご意見を頂き、大変有意義な会となりました。その内容の一部については、次号の医学部新聞に掲載される予定としております。慶應医学が三四会員と共に一体となって創立100年、そして次の100年に向かうべき姿が確認でき、新病院棟建設に懸ける参加者全員の思いが強く伝わってまいりました。

医学部創立100年に向けて、そして新病院棟建設に向けて、どうか信濃町の教職員の方々はもとより、義塾そして三四会の皆様方にも多方面に亘るご理解とご支援、ご協力の程をお願いする次第です。

（整54回）

新病院建設を中核とした総合医学府構築に向けて

医学部長　末松　誠

慶應義塾大学医学部100周年に向けて11月教授会で「新病院建設を中核とした世界に冠たる総合医学府の構築」のための4つの基本理念を採択していただきました。(Ⅰ)全ての医療チームが結集し、国民の健康増進と疾患制圧に貢献するクラスター診療の実現、(Ⅱ)世界最先端の基礎臨床一体型医学の展開による国際医療拠点の創設、(Ⅲ)災害に強い都市型地域医療の推進、(Ⅳ)医看薬の連携による世界を先導する医療人の育成、を掲げ、信濃町キャンパスの次の100年に向けたインフラの整備や教育・研究・診療体制の整備を進めていく所存です。我々はこの4つの精神をしっかりと銘記して信濃町キャンパスの再開発に臨みたいと考えております。

(Ⅰ)のクラスター診療の精神は池田前医学部長時代から議論を重ねてきたものです。患者さん中心の医学医療を実践していくために慶應医学の特質である「基礎・臨床の垣根を低くして両者は一家族の如く」をフルに生かすとともに、診療科間の連携を容易にするソフト・ハードを徹底的に追求していきたいと考えます。(Ⅱ)では「国際医療拠点」を謳い「世界に冠たる」を語る以上、新病院は世界標準のJCI（Joint Commission International）を満たすことが必要になると考えております。また慶應義塾大学医学部は生命科学・医学のグローバルCOEプログラムを通じて幹細胞医学、システム生物学領域で世界を先導する研究を展開して参りました。この成果を十二分に生かした基礎臨床一体型医学とその展開研究を発展させるような新病院を構築していく必要があると考えております。国の財政がひっ迫している折、医学部の大きな原動力となってきた競争的研究資金の獲得のみでこれから将来の財務基盤を確保することは極めて難しいと考えます。診療報酬に依存した体質を一新し、臨床研究・治験活性化による新たな収入構造を構築することも重要なミッションです。その意味で平成23年度から向こう5年間の計画で稼働する厚生労働省の「早期探索型臨床研究事業」の採択は創立100年に向けて大きな弾みになると考えます。

さらに(Ⅲ)については、3月11日に発災した東日本大震災に鑑み、首都圏でのM8クラスの地震に十分に耐えられる新病院を作ることは論を待ちませんが、これまで力不足であった地域医療連携や三四会の先生方との連携を平時より緊密にすることによって、災害時にも防災・減災機能を発揮できるコミュニティーを作っていくことが極めて肝要と考えます。

平成23年は「医看薬合同教育元年」となりました。キャンパスの教職員各位のご努力により慶應義塾大学医学部・病院は帰属収支差額で2年連続の黒字となりました。平成18年度決算に比べて22年度決算は30億の改善となりました。一方で平成21年から始まった医学部学生の増員などに十分対応した教育への投資は十分にできない状態にあります。初期臨床研修のマッチングの低下、研修医・専修医の卒後教育システムの抜本的な見直しも迫られています。病院建設は我々の宿願ですが、同時並行で(Ⅳ)の精神を堅持して卒前卒後教育を支え医学医療の質の向上に資する政策の展開がぜひとも必要な時と考えております。このためには学内だけでなく三四会の各先生方のご支援ご指導が何より必要と考えております。何卒宜しくお願い致します。

（医化62回）

医学部100年に向けて

病院長　武田　純三

新棟が出来てから二十数年が経過し、配管の傷みによる水漏れなどが頻発して、老朽化が著しい。そのような中、3号館南棟の建設は、久しぶりの病院建設である。しかし、南棟の病床数は少なく、また3月11日の震災により、病院全体の地震対策が必要となった今、新病院棟建設は医学部・病院の悲願となっていた。

慶應義塾大学病院は、都心に位置する私立大学病院として、地元地域に留まらない関東一円に広がる患者さんを擁している。また、関連病院会や三四会員諸先生方とのつながりによって、医療連携を培ってきた。地域がん診療連携拠点病院の指定や、外来診療の予約制の開始により、医療連携室の強化による地域医療連携の重要性が増してきた。慶應義塾大学病院として、自らの担うべき独自の都市型地域医療を目指す必要がある。

また、東日本大震災の経験から、防災機能を強化して、大規模災害時においても病院機能を維持させる一方で、地域の施設と連携しつつ、避難・復旧のための空間・支援機能をいち早く提供できる体制を整えておく必要がある。帰宅難民への対応も重要で、特に外来患者の帰宅困難は、飲食や毛布などの一般的な対策に加え、疾患に対する医療の提供も重要な要素となる。

これまで慶應義塾大学病院が辿ってきた外来、入院患者の傾向を評価することは、これから我々が進むべき道を示してくれる。また、数年に渡り将来構想の検討を、オープンラウンジ形式で行ってきており、その意義は大きかったといえる。クラスター議論で話ってきたことの具体化を検討し、新病院棟に盛り込んでいく必要がある。

3号館南棟の竣工が平成23年の春に、診療活動は8月から開始する予定である。中でも3階には予防医療センターを開設して、大学としてのハイレベルの診断技術で受診者の皆さまからの要望に答えられる人間ドックを開始する予定である。上層部の5階、6階は個室病室で、什器類の質を上げるだけでなく、何かと不自由な入院生活を、患者さんの要望に答えて、少しでも気持ち良く過ごしていただくための工夫を凝らす準備をしている。

新病院建設に向けて、どんな医療を行い、どんな建物を建てるのかの考えを、4つのコンセプトにまとめた。

新病院建設を中核とした世界に冠たる総合医学府の構築

Ⅰ）全ての医療チームが結集し、国民の健康増進と疾患制圧に貢献するクラスター診療の実現
Ⅱ）世界最先端の基礎臨床一体型医学の展開による国際医療拠点の創設
Ⅲ）災害に強い都市型地域医療の推進
Ⅳ）医看薬の連携による世界を先導する医療人の育成

建設資金の捻出には、病院収支の改善が必須の条件である。収益向上とコスト削減により、安定的な病院財政基盤を確立して、財の独立と持続的発展を目指す必要がある。

慶應義塾大学病院は、福澤先生、北里柴三郎博士から建学の精神を受け継いでいる。これら慶應医学の精神を伝承し、これからも継続して実践していける病院の建設に努力したい。

（麻52回）

鑑往知来

1961年にYuri Gaganinが人類初の宇宙飛行をしてから50年が経ちます。この間に人類はロケット技術、地球周回軌道の長期滞在技術、地球帰還技術等の有人宇宙技術を獲得してきました。日本でも1985年には宇宙飛行士が訓練を開始し、これまでに9人の日本人が15回の宇宙飛行を行い、人類の活動圏を地球から宇宙に広げてきています。

今や「宇宙で生活し、仕事をする」ことが日常茶飯事になりました。当初は米ソの国威発揚を原動力とした宇宙開発ですが現在では国際協力が必要不可欠で、その象徴的なプロジェクトが15ヵ国が参加して行われている国際宇宙ステーション計画です。また、さらなる発展をめざして宇宙商業利用も促進されています。一般人の宇宙旅行が実現可能となる時代もそう遠いものではありません。宇宙飛行を健康で安全に行うために医学が果たす役割は非常に大きく、そのチャレンジは、月や火星に人類の活動を展開（Exploration）していく事を支える医療技術の開発という観点だけではありません。一般の老若男女が地球周回軌道で宇宙旅行を楽しむための医療技術を開発していくことも大事なことです。

また、この分野を支える研究は、宇宙環境の人体影響の解明や健康リスクへの対策のみならず、地球上の重力や上下の空間識が生物に果たしてきた役割を基礎的に究明していくものです。このさき50年の宇宙開発は、〝人類のための宇宙開発（Space for Humanity）〟をモットーに、一般人の宇宙旅行の成功をきっかけとして驚くほどの速さで進んでいくことでしょう。

日々の忙しさの中でほっと一息ついたとき、宇宙旅行をしている自分の姿を思い描いてみてください。私は、〝月のホテルのラウンジで地球をみながら人生を振り返る〟をWish Listに書き込んでいます。

（宇宙航空研究開発機構　向井千秋　外56回）